

山と博物館

第40巻 第10号 1995年10月25日

大町山岳博物館

特集『山川勇一郎スケッチ展』10/10~11/5



ジュガール・ヒマールの氷壁 (1958. 5. 9) 山川勇一郎 作

「山川勇一郎スケッチ展」の開催にあたって

画家で登山家の山川勇一郎先生がチリに滞在中、アンデスの氷河で遭難死してから三十年経った。生前先生が描いた作品百七十点と使用のピッケルやスキー板を、次女小林素子さんと実弟武さん（東京芸大名誉教授）のご厚意により、当館へご寄贈を頂いた。山の町大町にとってこの上ない贈物である。

先生は大町が大変好きで時折おいでになり、相模さん経営の仁科町の山光荘、葛温泉の河鹿荘と、鹿島の狩野さく能さん宅へよく泊まられた。河鹿荘にはジュガール・ヒマールを描いた百号の大作があったが洪水で失った。狩野家の記念帳には「三十六年五月十四日今回は山登りに非ず雨の鹿島部落へポロ車で新緑をさぐる」と書き、絵が添えてある。

私は白馬で初めてお目にかかって以来親しくご交誼を頂いた。昭和三十二年秋、先生と深田久弥ご夫妻に同行した雨飾山の山行や、同じ年の夏、笠ガ岳への途中湯俣での野天風呂や、星空の下の野外の宴は懐かしい思い出である。山川、深田のお二人は同郷の誼もあって大変親しく、深田さんの著書の装丁や挿絵を沢山手がけた。お二人の他に、医師古原、写真家風見の両氏を加えた、昭和三十三年のジュガール・ヒマール探査行は話題を呼び、その成果を『ヒマラヤ画集』にまとめた。この本の序文に深田さんが「山川君は育ちのいいせいもあるが、おっとりしてコセコセしない。先を争ったり、他を押しつけたりはしない。私が山川君の絵が好きなのは、こういう性格が現れているからである。誠実なおおらかな絵である」と書いている。昭和三十六年には、長野県高校長協会が、高校生のための登山書『高校の登山』を上梓したが扉絵などを飾って頂いた。東京美術学校（現芸大）出身の逸材で一水会の優賞もうけた。十年間はデッサンの勉強だったという言葉は印象深く覚えている。

先生の妹さんが、終焉の地を訪ねた時、チリは、それはそれは人情の厚い国で美しい雪山の下に、画家山川愛する山に死す」と刻んで建ててくれた碑が夕陽に映えていたと語っている。

（大町山岳博物館顧問 丸山 彰）

山川さんと私

田坂 乾

私が山川勇一郎さんに初めて会ったのは戦後、バラの水彩画家真野紀太郎先生を馬込にお訪ねした時である。真野先生が山川家の部屋を借りていられたので、そこで紹介された。真野先生はバラがお好きで作っても居られ、私も山川さんもバラが好きでよく描いていた。

話してみるといろいろ趣味も似ていてそれからぐんぐん親しくなっていた。山川家にも家と同じニュードーンと云うピンクの蔓バラが垣根に咲いていた。

その後山川家のアトリエでヌードのクロックキーの研究会をする様になり、木曜会と名づけ多い時は十人位集まった。家から山川家までは近道を行けば三十分かかるだろうか。その仲間と奥秩父や伊豆の安良里や妙義山などへ写生旅行もして楽しかった。山川さんは車を運転していたのでよく私達は乗せてもらっ



暮れ近い窓の灯 山川勇一郎

た。山川さんのアトリエにはお父さんが造船技師だったので船のランプなど面白いものがあり、山好きの彼の山の道具などと一緒においであった。

一九五八年に作家の深田久弥氏等と朝日新聞の記事に挿絵を描くため山川さんは「ジェンガールヒマール探査隊」の一員として神戸から船で出かけた。シンガポールからの葉書には「何でも珍しく唯キョロキョロ眺めていまは一人でも珍しく強くと面白いです。街は出来ません。船の中では大いに画伯ぶりを発揮して居ます。今のところ最も有名な船客です。ヒマラヤの事忘れる位のんびりしていません」とある。得意の腕で船の中の人達の顔を描きまくっている山川さんの姿が髣髴としてくる。

カルカッタへの途中、シンガポールやベナン、ラングーンなどでたくさんスケッチをし、又一行三人が帰られて後二週間もカルカッタに残ってスケッチしていたと云う。その時おみやげに頂いたインドの布を家では今も大切にしている。山川さんはそんな布なども好きな人でいろいろ貯めていた。

山川さんの画集としてはこの後「山と溪谷社」から出した大版の「ヒマラヤ画集」がある。一九五九年には一水会に出品した「ヒマラヤ」を描いた絵で会員優賞をとられた。一九六四年にチリへ立つ前一月末に家でささやかな送別会をして三月、単身チリに渡って行った。

チリからの第一信には長い一か月の船旅で太平洋を渡り、カルデラに上陸し、家並や風景が中国の田舎町に似ていると驚き、又街に馬車が多く楽しい風景で君にも見せたいとある。サンチャゴでは言葉は解らないが何とかやっている。家でテープに探って行かれた息子の能彦のフリユートを時々聴いて楽しんでいられるとある。ポリビヤのラパスからの葉書には坂だらけの街で何処へ行くにもフリーし、ジープを借りてスケッチに出かけること。食物はうまくないが、風俗が仲々面白いこと。これからチチカカ湖を渡ってペルーへ行き、クスコ、リマを経てサンチャゴへ戻りマゼラン海峡へ行きますとある。

一九六五年の冬、真夏のサンチャゴからスペイン語で「クリスマスと新年おめでとう」と手描きの年賀状が来た。秋からポリビヤ、ペルー、二月頃までマゼラン海峡やナバリノ島、バイネ山麓などへ出かけ、チリは街も郊外も山も海辺も仲々良く君もきつと好きになると思うとある。この頃金山大使公邸に高級居候で住食に心配ない暮らしたよう

シェルバ・ラクバテンジン
1958. 5. 9 山川勇一郎

西穂小屋の窓から 1957. 6. 10 山川勇一郎

だ。これからアルゼンチンに廻る。皆さんと一緒にだつたらどんなに楽しいだろうとも書いてある。



スキーの手入れをする山川勇一郎さん 1952 田坂乾

リで御世話になった金山大使の夫人も来て下さった。そのパンフレットに私はこの様な一文を書いた。「山川君は山の本や雑誌に絵を描いていたし、一水会にも山の絵をよく出していたから、一般には山の画家と思われているのも無理はない。しかし、彼の絵を本場に知っている者は彼の周囲の僅かな友人だけである。彼は身近の美しいと思ったもの、描きたいと思ったものを貧欲に描いた本当の画かきであった。花も静物も、女の子も老人も、風景も何でも描いた。そして彼程デッサンの力のある画かきも得難いと思う。殊に後年多く使ったマジックペンは何と適確に、明快に、微妙なニュアンスまで表現したか。山川君は生来のデ

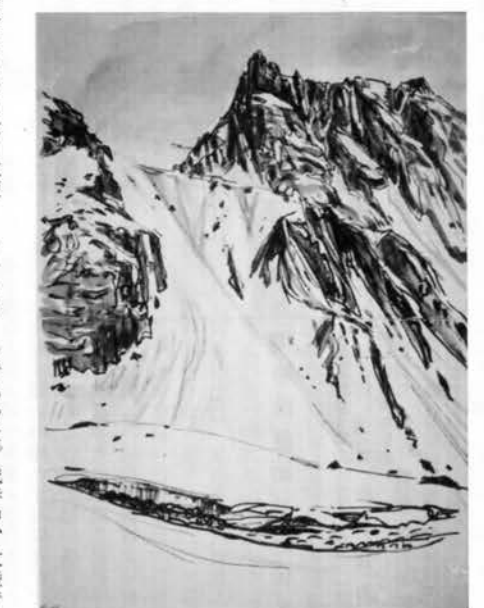
シナトゥールであった。戦時中、大陸で描いた数々のデッサン淡彩は対象にする愛情と厳しさを示す傑作であったが、後年の山村風景、ヒマラヤ行、チリ、ポリビヤ行での人物や街頭風景も素晴らしかった。一方、彼の色彩についても、私は敢えてコロリストと断言は出来ない。彼は色彩を幅広くは生かさなかつたが、狭い範囲で趣味の良さの極限を示した。基調をなす銀鼠色、茶褐色に点する僅かな華やかさは何と高雅で、趣味深いものであったろう。彼は売名を嫌ったから画かきの番付にも載っていない。画壇的には無名に近い。しかし、仕事は立派であった。生き方も一般には通用しないが、ユニークで立派であった。こういう魅力ある人間を神様は巧妙な手を使って陥し穴を用意し、天国へ連れて行ってしまった。」

(画家)

チリ人は皆親切で、子供も人なつこく、君に似たようなチリ人が居るともある。サンチャゴでは殆んど水彩ばかり描いていたようだ。秋、大阪府連中央アンデス登山隊に同行して、キャンプの付近を単独でスケッチしていたクレパスに転落、仲間の人達はそんな近く

の穴に落ちたとは思わず、あちこち探していた。三日後に救い出された時は凍傷がひどくとうとう息を引取られた。丁度銚子に旅行中だった私達はテレビでニュースを聞き、毎日折る様な気持ちだった。五十六才の若さで全く残念と云うより他はない。翌一九六六年の三月には読売新聞社や一水

会、窓井会、日本山岳画協会や友人達の後援で、伊勢丹で遺作展が開かれ盛会だった。私達は遺作展の会場で山川さんの絵が一枚どうしても欲しくて余裕もないのに「ラパスの裏町」のスケッチを求めた。いつも絵を売



ロマ・ラルガ氷河のクレパス 1965.11.5 山川勇一郎

兄の足

山川 武

兄の勇一郎と山歩きをした思い出といえば、末弟の私にとって、實は数える程しか無い。いまでも懐かしく思い出せるのは、まだ中学に入りたての頃、一つ違いの姉と一緒に兄に誘われ、三人で秋の大菩薩峠を越えた時のことである。

峠の鞍部でひと休みし、兄がリックから絵具箱を取り出して三号の板にスケッチし始めると、しばらくはそれを眺めていたような気もするが、やがて退屈して何時の間にかうたた寝をしてしまったようにも思う。ほとんど登山者も通らず、静かな峠の午後であった。この時描かれた油のスケッチはいまも残され



奥又白谷にて 1940.6.15

ていて、当時の印象を鮮明にのみがえらせてくれる。(本館蔵3F「大菩薩峠の秋」)

その翌年、昭和十五年の六月、兄は上高地徳沢の小屋で召集令状を受け取り、まもなく電信隊の一兵士として北支に出征していった。

これといった戦闘にも遭遇せず、二年ほどもたった頃の便りを読み返してみると、「風呂に入りながら雨の音を聞いたりすると、山の湯を思い出す」とか、「アリュージュンへ上陸したね。新聞でみるとまだ雪がある。雪。どうも雪にとっつかれた気持ちはまだ抜けないよ」などと、なお山や雪への想いが書きつづられる。

一方、此の頃になると「北支は面白い。油絵にはもってこいだ」とか、また「夜は風呂焚きの支那人の子供を写生している」などと、あらたなモチーフの芽生えに想いをめぐらしているのがわかる。私宛の葉書にも、ロバに乗った少年の姿などが描かれていたりした。配給された軍事絵葉書、M画伯筆「追撃スル野砲隊」を使い、その裏面に「此のエハガキ、いやな絵だね」と書かれていたこともある。兄はそのころから、「北支には絵描きとして暫く留ってみたい」と洩らすようになり、昭和十八年には現地除隊を許可され、北京を中心に、前門大街、裏町の理髪所、老太々、姑娘など、存分に華北の街と人々が描けるようになった。当時、兄の作品の多くは水彩かコンテによる素描で、油絵はほとんど無かったが、幾度か分けてどっさり留守宅に送り届けられ、殺風景な戦時中、荷を解くのが私の楽しみの一つであった。

兄は帰国後、それらをもとに、油のタブ

ローに制作しなおす心積もりでいたらしい。幾度か、それは試みられていたようだが、結局タブローとしては実らず、スケッチのままにとり残されてしまった。兄にとって、画室で改めて描きなおよすということは、いかにも不得手な作業だったらしい。秋の展覧会出品制作の場合もそうだった。

兄の場合、そこであらたに造り出されるものよりは、むしろ失われるものの方が多かったようにみえる。兄にとつては、現場での真率なスケッチこそが、もつともよく兄の画質を生かすものだったような気がする。

終戦の翌年、昭和二十一年の春、兄は六年ぶりに荒廃した故国に引き揚げてきた。底をついたわが家の家計のなかで、兄は意外と割り切った一面をみせ、進駐軍相手の似顔絵描きを「面白いんだ」といって結構楽しんでる時期もあった。それらもいつしか志賀高原米軍キャンプの専属スキー・コーチに転じ、さらに山やスキー雑誌へのアルバイトで多少の小遣銭が稼げるようになると、もはや兄の全生活は山とスキー一色に塗り潰されてしま

う。深田久弥氏の話によると、兄はよく「暇のあることが第一の贅沢ですよ」といっていたそうだが、兄は、兄一流の我儘で、その暇を無理矢理に作ってしまい、第一の贅沢、山遊びを存分に楽しんだ。

兄は、確かに我儘だった。しかし、それは幼児の無心さに近かったといえる。ことに滑降の醍醐味には耐えられなかったらしい。ヒマラヤにも、アンデスにも、スキーを持ちこんだ。それが最後です兄を山にのめりこませ、画壇からも、最末にはこの世からもサヨナラさせてしまった。兄は、記録を競うアルピニストでもなければ、孤独な山の思索者でもな



かった。気の合った仲間と山旅を楽しむ、ちよびりお洒落なロマンチストであったといえるかもしれない。

後記 兄は、特に友人には恵まれていたように思います。この度も、兄を理解して下さる親しかった方々のお力添えによって、兄の遺作に愛用のビッケルとスキー板を添え、大町山岳博物館に収蔵して頂けることになりました。

兄が愛した山々の、無類の展望をほいままにする当館を想いの場とすることができ、兄も心から喜んでいてのことと思います。兄に代わって厚くお礼を申し上げたく思います。(女子美術大学教授)

山と博物館第40巻第10号
一九九五年十月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL 0261-2211
大町 山岳博物館
印刷所 長野県大町市俵町 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇五四〇一七三三三三